

# 「信頼」と「安心」の言葉のイメージの差異について

大山 薫\*・小杉 考司・恒吉 徹三

On Verbal Image Difference between“Trust”and“Assurance”

OHYAMA Kaoru\*, KOSUGI Koji, TSUNEYOSHI Tetsuzo

(Received January 8, 2013)

キーワード：信頼、安心、イメージの差異

## 1. 問題と目的

人間関係において信頼は、日常生活でも臨床場面でも重要視されている概念である。たとえば Erikson(1959)は、信頼を健康なパーソナリティの礎石としてとらえており、「他人との関係においては、普通の意味でほどよく人を信頼していることを、自分との関係においては、信頼に値するというシンプルな感覚」で、特別に意識されないほど基本的なものであり、基本的な信頼は養育者との相互性の中で発達するものとして位置づけている。つまり、相互性の中で発達する当然視された概念であることを指摘している。一方、社会心理学的な立場から山岸(1998)は、従来の信頼研究では、定義があいまいで信頼と安心の区別がなされていないこと、さらに、「信頼」という言葉を定義するさい、相手の意図に対する期待としての信頼に質的に異なる「安心」という側面があり、2つの側面で構成されていることを指摘している。加えて、信頼は、社会的不確実性が存在しているにもかかわらず、相手の(自分に対する感情までも含めた意味での)人間性ゆえに、相手が自分に対してそんなひどいことはしないだろうと考えることだととらえている。これに対して安心は、そもそもそのような社会的不確実性が存在していないと感じることと分けて述べている。しかしながら、日常的な場面で、信頼や安心という言葉を使う際に、かならずしも社会的不確実性の有無に基づいて判断しているとはいえないであろうし、信頼の側面としての安心の定義は、日常的な場面で認識されている言葉の印象と対応しているかについては十分検討されていない。

そこで本研究では、「信頼」と「安心」という言葉のイメージがどのようにとらえているか検討することを目的とする。

## 2. 調査 1

### 2-1 目的

「信頼」と「安心」の言葉のイメージの差異をとらえるため、「信頼」と「安心」のそれぞれの類義語、対義語との印象の違いを比較検討することを調査1の目的とする。

### 2-2 方法

調査対象者：大学生27名(男性15名、女性12名、平均年齢19.6±0.99歳)

調査期間：2010年6月

手続き：A大学内の教室で質問紙を配布し回答を求めた。

質問紙の構成：評定する単語は、信頼と安心の類義語と対義語のうち名詞である15単語(愛着、安心、安全、依存、依頼、慰め、疑惑、拒絶、焦燥、信用、信頼、心配、不安、のん気、要求)を抽出した。SD法を用い

\*山口県中央児童相談所一時保護課

て、15単語に対して井上・小林（1985）から選んだ21対の形容詞を提示し7件法で回答させた。

### 2-3 結果

「信頼」と「安心」についてのSD法のデータを合わせて因子分析（一般化された最少二乗法、バリマックス回転）した結果、3つの因子が抽出された（累積寄与率は0.52）。各因子の項目別因子負荷量を表1に示す。

表1 因子分析の結果

	I	II	III
嬉しい	-0.76	0.29	0.02
明るい	-0.75	0.31	-0.24
良い	-0.74	0.38	0.04
醜い	0.70	-0.38	-0.10
冷たい	0.69	-0.48	0.17
たくましい	-0.69	-0.05	0.16
消極的な	0.66	0.29	-0.04
疲れた	0.64	-0.13	0.13
臆病な	0.63	0.20	0.04
<b>弱気な</b>	0.56	0.33	-0.04
落ち着いた	-0.54	0.41	0.10
狭い	0.48	-0.27	0.26
激しい	0.40	-0.68	0.23
うるさい	0.03	-0.67	-0.05
地味な	0.10	0.59	0.07
やわらかい	-0.25	0.50	-0.47
真面目な	-0.44	0.29	0.63
きちんとした	-0.46	0.11	0.58
慎重な	-0.12	0.29	0.58
重い	0.22	-0.14	0.57
敏感な	0.11	-0.16	0.51

因子負荷量.48以上の項目を抽出したところ、第1因子は「嬉しい」から「狭い」までの項目とし、悲観因子と命名した。第2因子は「激しい」から「やわらかい」までの項目で、温厚因子と命名した。第3因子は「真面目な」から「敏感な」までの項目とし、几帳面因子と命名した。

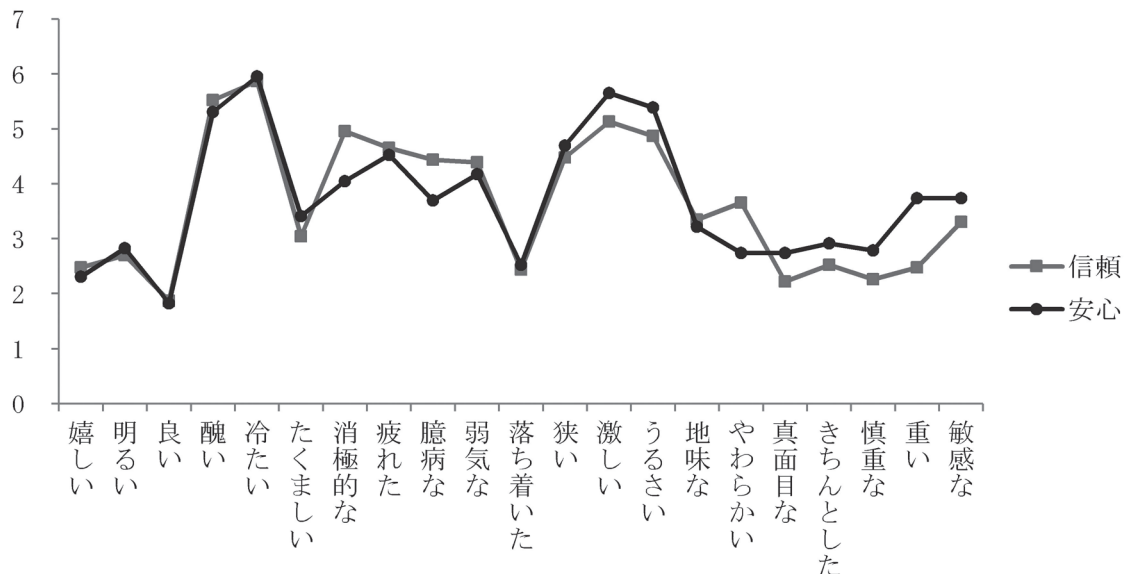


図1 SD法による「信頼」と「安心」の印象についてのプロフィール

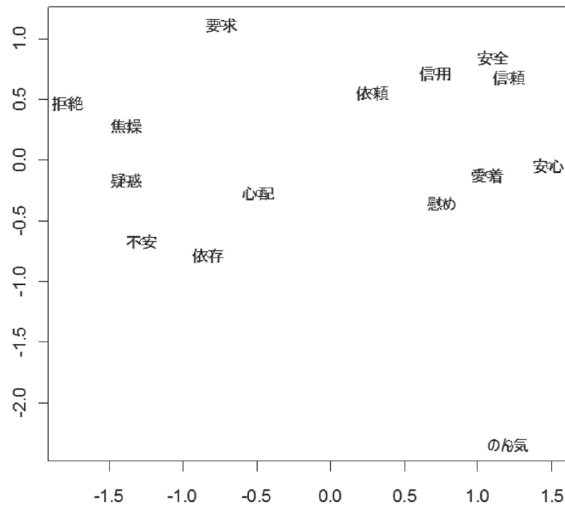


図2 SD法のデータによる単語間の距離

次に、SD法によって得られた「信頼」と「安心」の印象の平均値を各因子の項目順にプロフィールにしたものを図1に示す。

「信頼」と「安心」のプロフィールを比較すると、いずれも統計的に有意ではないが、重なる部分と、異なる部分のあることが示された。悲観因子では、12項目中「消極的な」「臆病な」の2項目で「信頼」の得点が「安心」の得点より高いが、大部分の項目で差が無い。温厚因子では、4項目中「激しい」「うるさい」「やわらかい」の3項目に差が認められた。さらに、几帳面因子では、「信頼」の得点が「安心」の得点より大部分の項目で低い結果であり、特に「真面目な」「慎重な」「重い」の得点が低い。つまり、悲観因子の項目の一部で信頼因子の得点が高く、温厚因子と几帳面因子では安心因子の得点の高い項目が多いことが示された。

さらに、因子ごとに形容詞対の評定値の平均値をもとに単語ごとにDスコアを算出し、多次元尺度構成法 (multi-dimensional scaling:以下MDSと略す)により、各単語の類似度を示した(図2)。

図2をみると、「信頼」の類義語(信用、依頼)は「信頼」の単語の近くに、対義語(疑惑、拒絶)は遠くに配置されている。「安心」にも同様の関係がみられた。ここで、「信頼」と「安心」の距離は最も近い類義語ほどは近くなかったが、類義語と似た距離感であった。

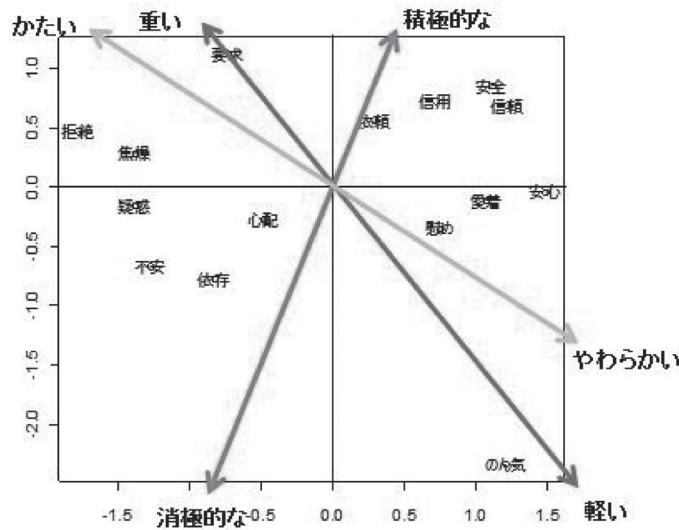


図3 SD法のデータによる単語間の距離

MDSの図中に、SD法の項目の中から3つの対語を軸として組み込み、さらに詳細に検討する。組み込んだ3つの軸は、「重い-軽い」の軸は、左上から右下に「重い」、右下に「軽い」、「消極的な-積極的な」の軸は、左下に「消極的な」、右上に「積極的な」、「やわらかい-かたい」の軸は、右下に「やわらか

い」、左上に「かたい」、が組み込まれた。相対的な差異ではあるが、「信頼」は「安心」より積極的であり、「信頼」は「安心」より重く、また、「安心」は「信頼」よりやわらかいという結果であった。

## 2-4 考察

結果より、信頼は几帳面因子の得点が高く、安心は温厚因子の得点が高かった。つまり、信頼と安心のことばの印象は異なる要素が重視されていると考えられた。

そこで、安心と信頼のSD法の平均値を図示したプロフィールで差があるものに着目して考察する。「やわらかい」という項目に対して、信頼は偏った印象は示されていないが、安心はやわらかいという印象が強いと考えられる。同様に、「消極的な」と「重い」という項目に対して安心は偏った印象は示されていないが、信頼は積極的で重いといった印象が強いと考えられる。この点をさらに検討するために、「やわらかい-かたい」、「消極的な-積極的な」、「重い-軽い」の軸を組み込んだ結果、「信頼」は「安心」よりも、積極的で重く、「安心」は「信頼」よりもやわらかいイメージのある言葉だと考えられた。

しかし、3つの軸を組み込んだ分析だけでは十分に検討することができていないため、より詳しく単語間の距離を検討するために調査2を行う。

## 3. 調査2

### 3-1 目的

調査1の結果で得られた「信頼」と「安心」とそれぞれの軸上で逆の位置にある7つの単語を選択し、一対比較法により単語間の距離をより詳細に検討することを目的とする。

### 3-2 方法

調査対象者：大学生20名(男性10名、女性10名)

調査期間：2010年7月

手続き：調査1の結果から、「信頼」と「安心」、またこの2つの単語とは逆の位置に置かれた「拒絶」と「不安」、および中間に置かれた「心配」、上下に分かれた「要求」と「のん気」を採用した。これら7つの単語がそれぞれ書かれたカードと、直線上に7つの目盛りを記載したA4サイズ用の紙、結果を記録する用紙を準備し、一対比較法を行った。2つのカードを提示し、似ていれば近くに似ていなければ遠くに置くように教示した。カードの組み合わせの順番は乱数表を用いた。

### 3-3 結果

一対比較法によるデータを単語ごとにDスコアを算出し、MDSを用いて分析をした(図4)。7つの単語の位置をプロットした図をみると、「不安」と「心配」が重なり、それ以外の単語は距離が離れている結果となった。

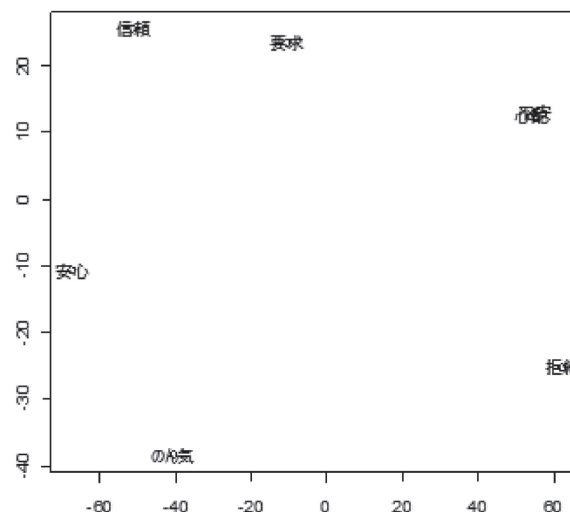


図4 一対比較法による各単語間の距離

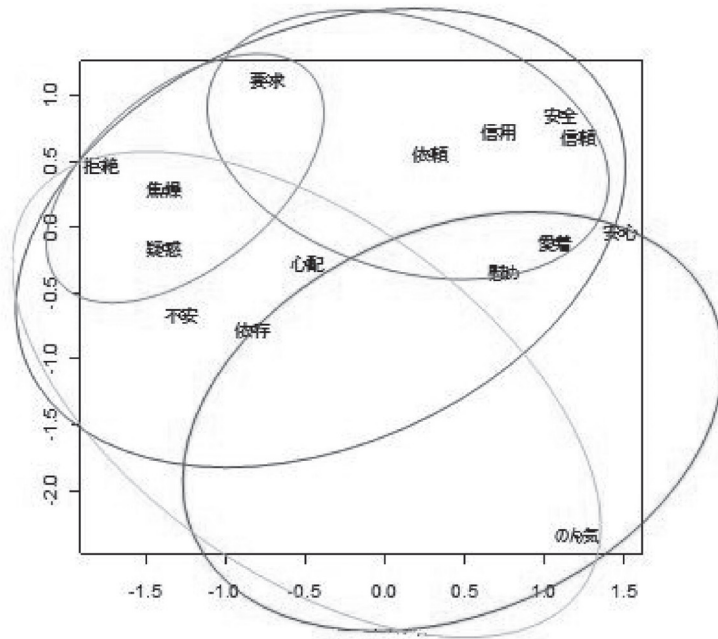


図5 一対比較法のデータによる単語間の距離とグループ化

ひとつの軸（横軸）からみた位置関係では、「信頼」も「安心」もそれぞれの対義語との距離は大きく離れているが、もうひとつの軸（縦軸）からみた位置関係では、「安心」よりも「信頼」のほうが対義語との距離が離れていることが示された。具体的には、横軸上の位置関係からみると、どちらの言葉も、「不安」「心配」「拒絶」とは遠く、「のん気」とは近い位置関係にあった。また、縦軸上の関係からみると、「信頼」は「要求」「心配」「不安」と近く、「拒絶」「のん気」とは遠い位置関係にあった。一方、「安心」は、「拒絶」とは近く、「要求」や「のん気」とは中間的な位置関係にあった。

調査1の結果の分析を踏まえて（図3）、単語の配置によりグループを作成した（図5）。各グループの名称は、調査1の図3で組み込んだ軸の名称をもとにした。まず、「重い」という印象のグループの中に「拒絶」「要求」「不安」「心配」「信頼」といった言葉がまとめられた。その中でも「要求」「信頼」は「積極的な」印象のグループの中にもまとめられた。さらに、「要求」「拒絶」は「かたい」印象のグループの中にもまとめられた。「不安」「心配」「拒絶」「のん気」は「積極的な」印象のグループの中にまとめられた。「安心」「のん気」は「やわらかい」印象のグループの中にまとめられた。

### 3-4 考察

横軸上の位置関係からみると、どちらの言葉も、ネガティブな意味合いのある言葉とは距離のあることが示されている。また、縦軸上の関係からみると、「拒絶」との位置関係に違いがあり、「信頼」は「安心」よりも距離があり、関係を断つことと信頼とは対極に近い概念であると考えられた。

7つの単語について、形容詞・形容動詞と単語を結び付けることにより、それぞれの言葉の印象を示すグループについて考察する。

「重い」は「対象を必要とするもの」と考えられ、その中でも、「積極的な」という印象を持つものは、「その対象に接近したいもの」としてとらえられた。また、「かたい」という印象に含まれるものは「対象に対して能動的態度が必要とされるもの」と考えられた。「消極的な」という印象に含まれるものは「対象を回避するもの」と考えられた。

「信頼」は「重い」かつ「積極的な」グループに入り、「安心」は「やわらかい」のグループに入っており、それぞれが異なるグループに含まれた。「信頼」は対象を必要としており、「安心」は受動的態度が必要であると考えられた。つまり、ふたつの言葉のイメージには、対象の存在が必要であることや、態度の能動・受動の点において異なるものと考えられた。

## 4. 総合考察

調査1、2の結果から、「信頼」と「安心」の言葉のイメージの差異について総合的に考察する。得られた結果を簡略に述べると、手法を変えて検討したが、「信頼」と「安心」は、一部の印象は異なっているが、一部の印象は重なりあっていた。つまり、この二つの言葉には、類似点と相違点の両面のあることが示された。

類似点は、悲観因子に含まれる項目に対するイメージである。2つの言葉は意味的には異なるが、部分的には印象の重なる部分が認められた。この点では、従来の信頼研究で、信頼を定義する際に安心との区別がなされなかった結果を支持するものだといえる。一方で、他の因子においては2つの言葉の印象には山岸(1998)が指摘するように相違点のあることが示唆された。「信頼」は几帳面因子、「安心」は温厚因子において特徴的な印象がもたれていると考えられる。

調査2の結果をふまえると、「信頼」には対象が必要であり、対象への接近傾向(欲求)との関連の検討が今後さらに必要だと考えられる。一方「安心」は、受動的な姿勢で得ることが出来るものと考えられる。つまり、「信頼」と「安心」の言葉のイメージには、異なる条件が想定されているものと考えられる。水野(2004)は、信頼関係は「安心」を中心とした関係であり、信頼と安心を切り離して考えることは難しいことを指摘している。しかし、本研究の結果からは、ふたつの言葉の印象には部分的には違いがあり、「信頼」と「安心」を別の概念として捉える必要があると考えられる。

一対比較法による単語間の距離からすると(図4)、調査1で対称的な位置にあった単語は調査2でも同様の結果となっている。ただし、横軸の関係においては、左右対称の位置に配置されたが、縦軸の関係は、調査1と調査2において同様の位置に配置された。

つまり、本研究の結果を総合的に考察すると、「信頼」と「安心」の言葉のイメージは、ある観点からとらえると近いイメージであるが、他の観点からとらえると遠いイメージをもつ言葉であると考えられ、重なりつつ異なるイメージが持たれているものだと考えられる。

本研究は、「信頼」と「安心」という人間が社会生活を営むうえで重要な概念を、個人のもつ日常的な言葉のイメージを通して検討したものである。探索的な基礎研究といえるが、村田・安藤・沼崎(2009)らが社会心理学研究の動向として、生物学的存在としての人という視点、社会的存在としての人と適応的人間観、社会問題の解決を目指す社会心理学、クロスロードの社会心理学の4つに分けて概観しているなかで、さまざまな学問分野と関連しながらも、「日常生活の常識から大きく隔たらない立場を維持」することの必要性を指摘しており、筆者らの主張ともつながるものである。

また、臨床心理学と社会心理学の中間に位置する研究といえる。そこで、臨床的な領域への寄与について検討すると、たとえば、児童相談所の一時保護所での関わりをあげることができる。一時保護所は、入所している児童に安心、安全を与えることが目的とされた施設であり、心理職は他職種と協働しながらこの目的を遂行することが期待されている。安全感の乏しい外的環境から保護された児童は、保護的な環境の中で、職員や入所している他の児童との関係を築くことになる。これまでの環境の影響もあり、他者との関係づくりへの過度の慎重さや繊細さが示されることもあり、また、相手が信頼に足るかを試すような大胆な行動が生じるなど、他者との関係構築上の課題を抱えている場合もある。本研究の結果をふまえると、「信頼」は積極的な印象の強い概念であり、「安心」は受動的な側面が強いことが示された。そこで、職員は可能な限り児童に合った環境、たとえば、信頼関係の形成にさいして、児童の示す積極的な関わりを尊重し、安心できる場や関係を提供することが求められているともいえる。

しかしながら、本研究でとらえた「信頼」と「安心」のもつ日常的なイメージと、一時保護所に入所してくる子どもたちのもつイメージの相違点や共通性については、さらなる検討が必要である。

## 付記

本論文は、平成22年度の「心理学研究演習」の授業で、大山薫が小杉考司の指導のもと執筆した原稿に、さらに加筆修正し、そのさい恒吉が監修したものです。

## 文献

- Erikson, E. H. (1957): *Identity and the Life Cycle*. International University Press. 西平直・中島由恵美 (訳) (2011) : アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
- 井上正明・小林利宣 (1985) : 日本におけるSD法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観 教育心理学研究 33 253-260.
- 小杉考司 (2007) : 社会調査士のための多変量解析法 北大路書房
- 水野将樹 (2004) : 青年は信頼できる友人との関係をどのように捉えているのか—グラウンデッド・セオリー・アプローチによる仮説モデルの生成— 教育心理学研究 52 170 - 185.
- 村田光二・安藤清志・沼崎誠 (2009) : 社会心理学の研究動向 安藤清志・村田光二・沼崎誠 (編) : 新版 社会心理学研究入門 東京大学出版会 pp223 - 229.
- 末永俊郎 (1987) : 社会心理学研究入門 東京大学出版会
- 利島保・生和秀敏 (1993) : 心理学のための実験マニュアル—入門から基礎・発展へ— 北大路書房
- 山岸俊男 (1998) : 信頼の構造こころと社会の進化ゲーム 東京大学出版会